資料渉猟余話

その50

黄眠先生が行く 8
篆刻家・岳卿の顔

嶋　不濁

黄眠先生、大患後初めての遠出となった昭和14年5月の法事での帰郷は、それを聞きつけた明治29年に飯田小学校の1年生となった半白禿頭の友人たちの歓待が待っていた。3月に『美の司祭』により文学博士号を受け、大患で辞した早稲田大学の教授に再び就任したこともあって、その温かい歓迎ぶりに、尾羽打ち枯らしての離郷後初めての故郷ではあったが、黄眠先生の心に里心がついた。晩年、愛宕に居を構えるきっかけになった帰郷であった。

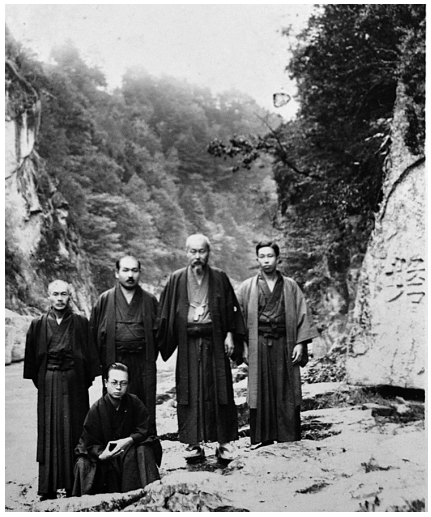
気をよくした黄眠先生は、その翌年の昭和15年7月半ばから9月18日までの飯田市伊賀良北方入野の伊藤政吉方離れ「大凪山荘」(後に水鶏の宿と呼ばれる)で過ごす。その生活の様が描かれた「山荘日記」の中に、2度登場する篆刻家・岳卿という人物がいる。全集では残念ながら「缶卿」となっているが、他の著書では中神岳卿となっている。

最初の登場は、8月14日。黄眠先生の注文した「白字文曰日夏印。朱字文曰姫城黄眠」の二つの印を大凪山荘まで届けてくれた。黄眠先生は「刻料廉にすぎて芸術家としての岳卿に気の毒故、随筆聴雪廬小品持ち来りしを與ふ」と、自身の新刊本を寄贈している。ちなみにこの2つの印は松岡耿介が『伊那』(777号)の口絵で紹介し、松岡氏の没後、他の蔵書印などと一緒に飯田市美術博物館に寄贈された。次は9月6日。正午に訪ねてきて「風越山頂枯木材に予の文字「心頭無事」を離りしもの一環」をくれた岳卿に対し、黄眠先生は河竹繁俊から到来物の吉野葛をもってもてなしている。「心頭無事」の篆額は所在不明である。岳郷の印を、黄眠先生はよっぽど気に入ったのか、『随筆風塵静寂文』(昭和17年5月刊)の見返しを岳卿の印をはじめ様々な蔵書印で埋め、その奥付の検印にも岳卿の刻んだ印を使っている。

堆朱翁・湯浅光悦にしろ、篆刻家の中神岳卿にしろ、黄眠先生の嗜好に似つかわしい人物の存在は故郷の印象をさらに良いものにしたことは疑いない。湯浅光悦は「堆朱翁の家」(昭和14年5月記、『聴雪廬小品』所収)や「飯田かたぎ」などに黄眠先生自らも書き、『山居読書人』出版記念会の折の写真にも黄眠先生と一緒に最前列に並んでいるので顔も知っていたが、中神岳卿については、黄眠先生に関わりの深い文化人50人近くを集めた出版記念会の席にもいない。

ところが、最近、ひょんなところで中神岳卿に出会った。天龍村出身の訓導・校長で神官、また書道家だった宮澤秀一を追っているうちに掲載の写真に出会ったのだ。宮澤は大正末期、校長退職後、神官として下伊那一円の神職を束ねる一方で、県の書道審査員、日本書道技芸院理事・審査員などを務めた書家。宮澤翁の遺族から拝借した段ボール箱3箱のアルバムの中に「昭和11年10月18日川路村仙峡閣」の裏書を持つ2枚の写真があった。天龍村村長だった遠山白雲(林景)と宮澤秀臣(秀一)が、書家比田井天来(随員として望月萬里の名前も記されている)を招き、天龍峡の割烹で酒を酌み交わしている。その写真の、向かって右から2人目が中神である。また翌日の龍角峰下「仙牀磐」での1枚では宮澤・遠山の前で一人屈んでいるのが中神であるとの裏書が読める。歴史的には、比田井天来の来郡の記念的な意味合いの方が強い写真だが、小生にとっては顔の見えなかった中神岳卿に会えた記念的な写真であった。かと言って、中神岳卿の全貌が明らかになったわけではないが…。

比田井天来は日下部鳴鶴の「書勢」の経営を引き継いだ現代書道の父と呼ばれた書家、書会のため来峡、師・鳴鶴が命名揮毫した天龍峡十勝の岩彫りを観光したのであった。



仙牀磐の前で撮られた1枚
(昭和11年10月19日　天龍峡)